

北海道方言研究会 50 周年記念事業座談会

参加者：道場優、菅泰雄、見野久幸、大鐘秀峰、佐々木冠、朝日祥之、葛西ひとみ
場所：札幌サンプラザ4階 藤の間

(司会：朝日) 本日はお集まりくださり、ありがとうございます。本日は、北海道方言研究会の50年を振り返りつつ、未来を展望する座談会を行います。こちらから質問をさせていただきたい内容を事前にまとめさせていただきました。それに従い、話を進めさせていただきます。まず最初に自己紹介をお願いします。

(道場) 私は、今、佐々木さんがしている事務局長をしていました。小野米一先生の次に長く、22年間務めさせていただいた道場と申します。現在は、大鐘会長から顧問を拝命しております。北海道方言研究会には、創立の1974年7月から参加しています。

私が通った東京の大学が二松学舎大学で、入った方言研究のサークルで方言を研究するきっかけとなりました。そのサークルの活動では、国立国語研究所の徳川宗賢先生からいろいろなアドバイスをもらい、研究をしていたこともあり、そっちにのめり込んでしまって4年間を過ごして、全国の調査とかいろいろなことをやって方言の勉強をする機会に恵まれました。

その後、もう少し勉強したいと思い、東京都立大学の大学院に1年在籍しました。そこで平山輝男先生にお会いし、特に全国のいろいろな人たちが、都立大学の学生主催の方言研究会にたくさん集まって発表していて、方言の研究ってすごいんだなということを、勉強させていただきました。1年しかいないんですけども、千葉県の実験などもやらせていただきました。そのときに平山先生が、「あなた、北海道に帰るんだね」と言うから、「帰ります」と。「帰るんだったら北海道の方言を勉強しなさい」と言われました。

私は大学の卒論は、北海道の礼文島方言について書いたのですが、そのときの指導教官が国立国語研究所の研究員だった野村雅昭先生でした。その方は、国語学で有名な方です



けれども、方言研究の専門家ではありません。その方から紹介されたのが、飯豊毅一先生でした。飯豊先生からは、調査研究というよりも、資料の収集とか、休み時間になると、飯豊先生とか渡辺友左先生から、いろいろなことを勉強させていただいたところ、僕が「1年で帰る」と言ったら、「何で帰るの」と。「まだ少しいればいいんじゃないの」と言われました。そのときに飯豊先生が、「道場くん、あきらめないで、北海道の方言を勉強する気持ちがあるの?」と。それで、「やります」と言ったら、「旭川に小野米一さんがいるんだけど、実は私の大学の後輩に当たる」と。広島大学の大学院の藤原与一先生の門下生が飯豊先生であり、小野先生だったので、「北海道に行ったら、北海道の方言の勉強をしてる小野先生をぜひ手伝ってやりなさい」と。もう私は「はい、分かりました」と言って戻りました。

ところが、札幌の高校に入ったら忙しい学校で、もうそれどころではなくて、ずっと連絡しないでいたんですけども、そのときに小野先生がしびれを切らせて、飯豊先生から電話をちゃんとキャッチしていました。「道場さん、札幌に来てだいぶ時間が経っているんだけど、私に会いに来ない?」と言うから、あのときの約束を急に思い出して、飯豊

先生が会いなさい」言われたんだと思って行きました。そこに来ていたのが、私と城野光一さんと、小野先生でした。

城野さんは、どこか地方の高校の先生で、小野先生は、北海道の方言の研究をしていた人たちを一生懸命探していました。方言の論文を書いている人は誰かとか、発表しているのは誰かとか全部調べたのです。たまたま城野さんが『言語生活』に北海道のものを書いていたのを見つけて、それで声を掛けたいのです。

それで3人で集まって、北海道の方言のいろいろ気になったことを話し合おうという魂胆だったのですが、先ほどの話は、結果的に北海道方言を1人で研究するには大変なので、北海道方言研究会を立ち上げたいという気持ちを持って、実は、大分県から北海道に来られたのです。後から聞きましたら、藤原与一先生が、「小野くん、北海道で方言研究を頑張って来なさい」と。そのときは北海道教育大学の旭川分校の助手だったんですけども、そういうことで仲間を欲しがっていたということです。

それで、北海道に来てから6年後の1974年7月に「北海道方言研究会」を立ち上げて、たくさん道内から会員を集めて、道外の人たちも集めてということで、何とか「北海道方言研究会」が活動しました。それからいろいろな人たちが参加してくださって、「北海道方言研究会」がしっかりと活動できるようになりました。後からの話題に、小野先生の思い出がありますから、そのときにちょっと触れたいと思います。

そんな関係で、「北海道方言研究会」と、私の関係は42年間ですかね。そういうかわりを持っているということです。

(朝日) ありがとうございます。

(菅) 今のことに関して質問いいですか。その研究会は札幌で行ったのですか。

(道場) 札幌でやろうと。やっぱり札幌を中心にやろうと。ただ事務局は、道場は仕事で忙しいのであまり出て来られないし、城野先

生も忙しいということで、結果的には事務局は小野先生の旭川の教育大学の分校の国語学講座に置かれることになりました。後に北海道大学の先生になりますけれども、それまでずっと旭川の教育大学が事務局でありました。会報もずっと旭川の教育大学で、住所もそうになっています。

(朝日) 最初はどこでやったのですか。

(道場) それは札幌だったと思います。記録によると、昭和49年7月10日に札幌市の居酒屋に、道場、城野さんの、3人集まって、小野先生が「北海道方言研究会の過程と展望」というすごいものを発表しました。それが第1回目です。だから、例会は居酒屋さんに集まりました。第2回目が、札幌市の北農会館に3人で集まって、小野先生から「道場さん、あなた、北海道方言の発表をきなさい」ということで、「礼文島浜中方言の動詞」という題で発表しました。3回目は、北海道大学の教養部で、そのときには、井上史雄先生が北海道大学の教授になって来られて、駒澤大学の小林泰秀さんとか、後に副会長になる白尾忠悦さんとか、そういう方たちが参加しています。4回目は北海道大学です。だいたい、しばらくは5人です。その次に5回目が、旭川の教育大学で開催され、井上先生と道場と城野さんと、白尾さんの5人ですね。

例会はまた札幌に戻って、そのときに五十嵐三郎先生が北海道大学を辞められて札幌大学に異動したのですが、札大の五十嵐先生の研究室が会場でした。その後、石垣福雄先生は登別の校長をやっていた方で、その方も参加されて、後に顧問になります。その方を含めて、五十嵐先生の研究室に参加者していたその後の参加者を見ていきますと、知内の川内谷繁三さんが参加して、増毛の高橋明雄さんが参加したりして、僕以上におしゃべりな人たちばかりで、にぎやかな例会になったという感じです。

小野先生は、結構、道外の人たちも参加するように働き掛けていて。今、朝日祥之さんとか尾崎喜光さんとかが、すごく例会に来て

いるけれども、会員として意外と名前が出てこないけど、たくさんいました。だから『創立40周年の記念論文集』に小野先生が書いていますけど、道内の方が3分の2、道外が3分の1の会員だったと。小野先生も結構、学会などで紹介して会員になってもらっていたんです。それで125人なんていう時代もあったんですね。

(朝日) ありがとうございます。では、続けて見野さんお願いします。

(見野) 私のような者が北海道方言研究会に参加させていただいて会員の発表を聞きながら思ったことは、主に海岸の方言に興味がありました。海岸の地理的な勢力の状況、そしてそれがどのように動いていくのかということに興味、関心を持ってきました。

方言研究の道を歩もうとしたのは、1989年からです。最初、古平に調査に入りました。勉強をさせられた調査でした。それから岩内の調査です。岩内に調査に入るまで3~4年間が空いて、その調査が始まるまでにはほとんど終わってしまっていますが、私は岩内が地元なので入りづらいという不安がありました。

北海道海岸部は行くところは2度ほど回りました。それから北海道の方言がここだけにとどまっていたは本当の姿は見えないのではないかという、先人の学者さんたちの、本州の方言はたくさん、特に北海道と関係の深い方言の研究書はありますけれども、それを文献として引用するだけでは見えないものがあるのではないかと。同一の調査で自分の目でやっていく、そこに北海道内にとどまらず、東北や新潟とのつながりというものを少しでもとらえることができるのではないかとということで、北海道でだいたい1万人近い調査データを得て、それと並行して後半5年で東北4県と新潟。2008年から始めて、2012年で終わっていますが、50地点で3000人近い調査をしました。

また、自分が方言をしてこなかった経緯があるので、深いことはできないと考えていました。また時間的にも、資金的にもそういう

ものは無理だと考え、アンケート調査にしました。アンケート調査で、現地に実際に行って依頼をする。1日置いて、留め置き調査で回収するときにこれを確認すると。そうしたら間違いなどは少しでも防げるのではないかと。大ざっぱなことならとらえられるだろうと考えました。緻密なことではできないけれども、大きな動きならとらえられるだろうという考え方はありました。

ただ、調査の中で、方言で書かれている、ちりばめられた古文書を発見しました。これは積丹半島の美国で、平成7年、29年前のことになります。それ以降は、調査で北海道の各地を回ったときに、博物館とか郷土資料館などに足を運び、古文書がないかどうかを確かめるということをやりました。

今はもう調査は何もできませんから、こういう漁場に残された古文書に見える方言というものを調べてみようということで現在は来ていますが、これももうほとんど終わりだと思います。これがテーマらしからぬといえますか、基礎的なことをやってこない私にできる範囲だと思ってやってきました。



私は、大学では一切方言を勉強していません。東洋大学で学びましたけれども、東洋大学では国語学と、主に中世の戦記物語の言葉を勉強しました。国語学は小林芳規先生という訓点語学会で活躍されていた非常にエネルギッシュな若い先生で、学生を食堂に連れて行って、カレーライスと一緒に食べて、そして自分の研究、考え方を聞かせてくれました。

た。とにかく自分は前へ進むんだと。そして間違っただことは後で修正していけばいいと、そういう考え方を示されました。

それから、峰岸明先生。峰岸先生は記録語の勉強を教えてくれた。公家さんの日記に出てくる言葉、例えば「(何々の)間」という、これは漢文でも和文でもない。「御(何々)有り」というのも、どうもそのようなのです。そういう、公家さんが使って、文章に残した、そういう言葉があるんだということを見せてくれました。

ですから北海道に戻ってから、なかなか時間も文献を調べる余裕もなく、行き詰まりを感じていた折に、小野米一先生から北海道方言研究会への誘いがあり、参加するようになりました。昭和62年と記憶しています。

このとき北海道方言研究会は道場さんなども参加され、立ち上げがすでにしっかりとなされていて、その後、昭和50年代に入りますと、増毛や松前の大きな調査、あとを決定づけるような、そんな調査も終わらせていて、私はずっとその後ですから、そういう深いことは一切その後も分かりませんでした。

そのときは、私は岩内高校に勤めていました。勤めを終えて家に帰ってみると、小野先生からの手紙が届いていました。何で私にと思いました。私は一面識ありませんし、小野先生のことを聞いたこともありません。ひょっとしたら、小林芳規先生が広島大学で小野先生の師でもあったわけですが、そんなことでちらっとでも私のことを知ったのかなと思います。どうもそういうことでもありません。よく考えてみますと、当時、国語学をやるので学会員として、『国語学』という国語学会の雑誌を取っていました。昔はその中に名簿が載っていました。ですから、北海道という、国語学、たぶんそれではなかろうかなと思うのが出会いの本当の始まりです。

手紙は非常に丁寧で、優しい表現で書かれています。人となり分かるようになっていきます。字も、道場さんと同じように小野先生もうまいですね。わずか2枚でしたけれども、北海道方言研究会の紹介とともに誘いをということで入っていました。まさかこういう手紙がと、それはもう鮮明な記憶で

す。私は何もやっていませんでしたし、行き詰まってもいましたし、勉強してみたいなど思ったのでお誘いを受けて札幌へ、北24条の北区民センターへ出向いたということですから。それがいきさつです。

(朝日) ありがとうございます。

ちなみに、アンケートで留め置きをして集めに行くときに内容を確認するという方法を採用とおっしゃっていましたが、それは小野先生からののか、誰からなのか、または、自分でお考えになったのでしょうか。

(見野) それは回収していて、これは駄目だなど。このままささっとやっても、見ていて何か分からないのもあるし、そうなのかなというのものもあるから確認が必要なんだなど。それは忍路、古平での調査を失敗していますから、その教訓からです。少しずつ現地の人から教わるというか、現地の人たちのおかげというのはかなりあります。いろいろなことを聞かせてくれました。そのときにはテープを取るということ。そのときではないですが。

国語学なんかをやっていたから、テープを取るようなことはできなかったんです。国語学の方法はちらっと生きているのがあるんですよ。古文書をやるときにカードを取るのが癖になっちゃったというか。今のパソコンは非常に緻密にというか、全部並べ替えや、同じ語はぱっと1つにできるのですが、私はそんなことできませんから。昔はみんなカードだった。

(朝日) それでは、菅さんお願いします。

(菅) 私は、方言とのかかわりは大学に入ってからです。1971年に大学に入ったんですけども、そのときに五十嵐三郎先生の教養部の授業をとりました。

(道場) 北海道大学のね。

(菅) 五十嵐先生は国立国語研究所の「共通語化の過程」の研究の分担者として調査をさ

れていたわけです。親子3代で言葉がどのように変化するかということを授業の中で聞いた記憶があります。それが方言との最初の関わりですけれども、大学2年生の後期に文学部に移って、国語学概論の中でも方言の話の話を聞きました。その当時は今と違って休講が多かったわけです。

(道場) 例の学園紛争の闘争ね。

(菅) その後ですから、それはいいですけども。五十嵐先生は学外の多くの公職にもついておられて、お忙しく、休講が多くて、そんなに多くの回数、授業があったわけではないのですが、私にとっては非常に面白く、興味深い授業であったという記憶があります。

大学3年生のときに井上史雄先生が北大に着任されて、確か五十嵐先生の後任という形だったと思います。私の恩師は西田直敏という、『平家物語』とか待遇表現の専門家でした。西田先生の紹介を受けて、井上先生の教養の研究室にお邪魔したことがあります。井上先生は、私が大学院修士課程のときまで、北大にいらっやあって、その後、東京外国語大学に移られたのですが、私は既に大学院の単位を取ってしまっていたこともあって、井上先生の単位を取る必要がなかったのも、1977年の増毛の方言調査に参加することもありませんでした。その当時、学部時代、それから大学院と私自身の関心はもっぱら日本語教育だったものですから、方言とは直接関係はなかったんです。

1982年に大学院を出た後、旭川高専に就職することになりまして、それが教育大旭川分校にいらっやった小野先生にお世話になるきっかけになったかと思えます。私の場合はあまり方言を研究するように勧められた記憶はないのですが、ただ小野先生のところに来ていた中国人の留学生がいて、その留学生たちの日本語教育を担当させてもらったということがありました。

その後、1986年から1988年に国語研究所の江川清先生の、富良野と札幌の調査に加わることになりました。小野先生が推薦してくれたのです。旭川にいたころです。秋に行わ

れた調査でした。ちょうどそのころ、北海道で別れ際のあいさつで、「したっけ」というのがはやっていて、徳川先生は千歳空港で「したっけ」と染めたTシャツを買って、それで自転車で富良野の町を回って調査されていた、そのお姿を覚えています。佐藤亮一先生とか、真田信治先生、それから杉戸清樹先生、それから米田正人さんとか、小林隆さんもいたと思います。それから相澤正夫さん、それから沢木幹栄さん。吉岡泰夫さんもいました。それから、当時大阪大学の院生であった渋谷勝己さんとか、尾崎喜光さんもいました。それから金沢裕之さんもしました。彼らは真田先生とか徳川宗賢先生の教え子でしょうから、お弟子さんですから、方言の専門家です。それに比べて、私は方言についてはまったくの素人でしたから、気後れするというか、心細い状態でした。そんな中で、ビギナーズラックというのでしょうか、調査でかなりいい成績を上げたんです。その日、調査が終わってグラフに何件調査をやったか、個人ごとに結果が張り出されるんですね。

(道場) 何人やったか。すごいね。貢献はすごいね。

(朝日) 江川さんだからだったのでしょうか、きっと。

(菅) そんなこともあってか、その後も特に江川さんからは方言研究会とか学会でお会いするたびにいろいろとお世話になりました。

北海道方言研究会にいつ入ったかというのは、ちょっとはつきり覚えていないのですが、私は、1993年3月まで旭川にいて、その年の4月から札幌の大学に移ったのですが、札幌に来てからは頻繁に研究会に参加したという記憶があります。

小野先生が北大に移られてからのことですが、釧路の調査がありました。ちょうど昭和から平成に変わるときでした。そのときの釧路の町の雰囲気はずいぶんしんみりしたような感じがしたものです。その1989年の釧路の調査とか、1990年の札幌の調査があったころから方言研究会がより身近なものになった

わけです。ということで、旭川にいたころはあまり、研究会にはほとんど参加していなかったのではないかと思います。

あとは研究会との関わりで言うと、200回のときに司会をやっていたようなことです。そういったようなことで、私自身の方言研究のテーマというのは特にはないんです。調査に参加させてもらってお手伝いをしたということです。



特に研究テーマということはないですけれども、今考えてみますと、もともと五十嵐先生の親子3代の共通語化というようなことが頭の中にはいつもあったということが言えるかもしれません。

小野先生との関わりとしては、アイヌ語話者の日本語方言の研究。杉藤美代子先生が代表者であった「日本語音声」という大きな科研費のプロジェクトがあって、その中の北海道班のリーダーが村崎恭子さんでした。村崎先生とは日本語教育との関わりもあって、そこに私が参加させてもらって、奥田統己さんのフィールドでもある静内の方言とか本別などで、調査をいたしました。そのこともあって、小野先生が代表者になったアイヌ語、日本語話者の、日本語方言の調査にも関わって科研費の報告書を書いた記憶があります。そういったところが私の方言との関わりということになるかと思います。

(朝日) 旭川へいらしたころは、高専では国語の先生だったのですか。

(菅) そうです。

(朝日) 高専では、国語の先生でいらして、中国人等の留学生対象の日本語教育に関する授業は、それはそれで現在の分校でされたと。

(菅) 高専の1年生から3年生までは、年代としては高校生です。一般教育として、高校に準じた科目もあります。国語の担当教員でした。一応教科書は検定済み教科書を使うことになっていますが、高等教育機関として、かなり自由に授業ができました。今で言えば言語学の基本的なところの話とか、論理的な理屈を重視する観点で、外国語との比較を取り入れるなど広く「ことば」に関心を持ってもらえるような授業にしたりもしています。日本語教育の経験が役立ちました。「国語」というより「日本語」という内容に偏りすぎていたかもしれませんが、それは高専生にとっても興味を持てるものだったと自画自賛しています。体系的なデータの処理とか、言語学的処理と共通する部分もあります。いわゆる文学に偏った授業ではなく、詩とか短歌、俳句などはかなり端折ってしまいました。漢文は、中国語の古典であることを重視したり、古文では現代語や方言とのつながりなどを重視しました。

それから高専にも留学生も来ていましたので、高専でも、中国や韓国、インドネシアなどからの留学生に日本語を教えていました。以前から中国語や韓国語を勉強していたことが大いに役に立ちました。

(朝日) 分かりました。ありがとうございます。およそ1時間後に休憩を入れようかと思っていたのですが、ちょうど1時間たったので、ちょっとだけ小休止しますか。

(大鐘) 休憩しましょう。

=====休憩=====

(朝日) 研究会の設立については道場さんの

最初の話でうかがいました。小野先生はいろいろな方呼んで研究会の運営をされていたことはよくわかりました。見野さん、菅さん、何か追加があれば教えてほしいですけど、いかがですか。

(道場) その前に触れたいのが、僕は『創立40周年の記念論文集』に、自分の『北海道方言と私』とか、それから「あとがき」を書かせていただいたので、小野先生は「まえがき」を書いているので結構いろいろな部分があるんだけど、ちょっと強調したいのは、やっぱり道外の学会の結構立派な先生たちの応援というのは、すごくあるなと思いましたね。

まず、柴田武先生の話が出たり、徳川宗賢先生の話が出たり、もちろん間接的に飯豊先生とか、それから平山輝男先生とか、大島一郎先生とか、そういう先生が一生懸命学会に行ったときに、徳川先生は、僕が知っているからあれだけど、北海道方言研究会を紹介してくれて、一般の人がいろいろ興味を示して、そして、いろいろ会報を買ってくれたり。そのようなことで、やっぱりそれはいろいろな人たちがPRしてくれているんだなと。

あと1つは、特に道外の、僕は個人的にも付き合いのあった陣内正敬さんが大学の学生たちを、北海道の合宿とって、北海道の方言の勉強をしにわざわざ来てました。そのとき関西学院大学にいたんですけど、わざわざ来て発表するというので、彼が小野先生と僕に、「学生に発表をさせてもらえないか」と言ったので、僕が小野先生に、「ぜひ発表してもらいましょうよ」と。そして、学生5人くらいが入れ代わり立ち代わり発表したんです。それが2回あるんです。それでいろいろ交流したりして、小野先生はあまりお酒の席をつくるというのが得意でないものですから、僕が特別に酒宴の席をセットして。これはカットしてもいいですけど。

それから佐藤亮一先生が毎年に近いくらい、北海道が好きだといって、北海道の観光のいいところを回った後に、例会に来て発表して下さるんです。何度も発表してくださ

ったし、井上史雄先生もたまに発表してくださったり。それから、近々、上野善道先生もいらしていますね。だから、そうそうたる方が、北海道方言研究会で発表してくれるなんて考えられないことですよ。そういう外部の人たちに支えられたところがあると思います。

北大で100回記念をやりました。そのときには、ちょうど日本方言研究会とか国語学会のときにぶつかったので、全国のそうそうたる方たちが集まったんですけど、100回記念のときにすごい人でびっくりしました。200回のときも北大でやったんですけど、菅さんは覚えていらっしゃると思う。天気が悪かったし、50席ぐらいしか作っていなかったんです。そうしたら、どんどん、どんどん立ち見席ができてきて、もうイスをあちこち集めてきて一生懸命。講演会も真田信治先生とか小林隆さんとか、それから荻野綱男さんとか、そうそうたる方を連れてきて発表していますから、結構小野先生という方はそういう力のある人だなと思いました。だから、道外の方たちにもいろいろ支えられて、また道内の人たちも一生懸命で、会員も頑張ってきましたね。

(朝日) あと共同調査とかいくつか実施されました。今日、ご出席が叶わなかった小野先生について、もしここで発言しておきたいことがありましたら、お願いします。見野さんからお願いします。

(見野) 小野先生には、方言研究会とか勉強じゃなくて、私、個人的にすごく思うことや感じさせられることがあって。1つは、先ほどちらっと話しましたが、本当に始めの段階でのことなんですけれども、小樽の忍路というところで調査をしたんです。それを例会で3回、1991年から1992年、3回にわたって報告させてもらいました。何回目だったか記憶がはっきりしないのですが、あまり出席者がいなかった例会になっていたと思いますが、そのときに内容を見てくださって親身になって、それこそつたない原稿を見てくださって、ここはこうだよとか、これはこう考

えればいよと教えてくださったことがすごくうれしくて、それ以後の私の調査の励みになったといったらいかな。それが本当に私には、方言研究会での小野先生は忘れられません。

ざっくばらんに日常的なことを話すと、そういう場面は小野先生とはなかなか持ち得ない感じでしたので、本当に印象に残りました。

私はずっと北海道におられるのだろうと、札幌まで出向かれて方言の研究会も開いておられるし、非常に力を入れておられるようだからずっとおられるのだろうと思いましたら、なぜか北大を去られて鳴門教育大学へ赴任されましたね。私には、それはなぜなのか分かりませんが、そのときとても残念だなと思いました。

研究会にとっても1つの何かがなくなるのかなという。その後に残った役員の方々がそれぞれあって、そういうことを私は乗り越えずと来たわけですけれども。小野先生がどれほど向こうの方から、例えば事務局長の道場さんなり、よく連絡を取りながらやられたのか私には分からないことですが、とにかく去られたということは私には残念なことだなと。

(道場) 僕の個人の感覚で言うと、小野先生は、自分の研究を見て勉強しろという、そういう姿勢ではないかと。直接は教えないけど、やっぱり自分が郷土研究しているとか、いろいろなことをやっている中で学ぶべきものはたくさんあったわけでしょう。そこから学ぶという姿勢だったんじゃないかなと思います。何も聞かなかつたら、何も答えは言わないですよ。言え、そうだよとか、こうだよと言うけれども。そういうタイプの先生。

小野先生のように、いろいろなタイプの先生がいます。例えば徳川宗賢先生なんかは、よく教えてくれますよね、いろいろ。サービス精神で、僕は学生時代も徳川先生に教えてもらって、あれもこれもと聞いたら教えてくれるタイプの先生と、知りたかったら聞けと。小野先生は、そういう気持ちじゃないけ

ど、そういうタイプで、またあまりお話をざっくばらんにするような人でもないから、タイプのには、道場みたいなタイプじゃないですよ。

僕は、創立40周年の叢書第6巻に『北海道方言研究会と私』という思い出を書いたことがあるんですけど、そこに小野先生がどんなことをやっていたかという、とにかく発足以来、会の運営から、事務局から、会報の手書きから、印刷から、それから案内から、全部小野先生すべてやっていたんですね。恐縮はしたんだけど、できないから小野先生お願いね、といいことばかり言っていたんですけど、結局その後、やっぱり僕もそれぞれの方も育て、これをやらなきゃならない、あれをやらなきゃならないというふうになってきて、それを見ているいろいろな会の運営とかそういったことを、僕らは学んだんじゃないかなと。研究だけでなく。

それから小野先生は、北大から鳴門教育大学に移りましたよね。小野先生も書いているように、「北海道方言研究会が残るのか」と危機を感じたと。僕はうずうしいから、「先生が、何もしなくても残るよ」と言った。「その代わりに条件で、会長を続けてください」と。「今まで通りやれば、今まで通り例会もやって、会報を出していれば、会員が減るわけではないから大丈夫ですよ」と。そのときに、その当時の、副会長の白尾忠悦さんとか大庭吉光さんも、「それで、いいと思います」と。それで、会長を続けることになったけど。菅さんが次期の関係もあるから、菅さんに副会長を引き受けてもらって、副会長3人体制でいったんです。僕もそのとき事務局長を。それまでは会報作りとか、会場集めとか、そういう庶務の仕事ばかりしていましたから、もうそろそろということで、事務局長になったんですけども、そのときの小野会長への条件が、ざっくばらんに言うと、僕が「先生の奥様たちは、旭川に住んでいらっしゃるから、1年に1回は例会に合わせて来てください」と。「その代わりに、私たちの状況を見て、気になったら必ず言ってください」と。

それから、「来たときには、発表は必ずや

ってください」と。失礼にも、僕はしなさいと言ったんだね。してくださいと言わず、しなさいと。「あとは、僕らちゃんと留守を歩いていきますから」という話だった。だからやっぱり、それによって残った人たちが、菅さんはじめいろいろなことで一生懸命頑張っ
て過ごして、北海道に帰って来て、その通りになっていたからよかったということを書いているから、そういう心配も、小野先生本人の気持ちの中にあっただと思います。

(朝日) 菅さん、これに関して何かありますか。

(菅) 小野先生の時代は、例会は年に5回ぐらいありましたよね。

(大鐘) 5回ありました。午前、午後。

(道場) 6回もあった。

(菅) 6回するときもありましたけれども。発表者が集まらなかったときは、必ず小野先生が責任を持って発表なさる。これはすごいなと思ったことがあります。それから鳴門に移られてから、先ほど私、共通語化とかアイヌ語話者の日本語方言の話をしました。もう1つ小野先生のテーマとして、移住と北海道方言があります。それにも私は分担者として加えていただいて、徳島県からの移住者の調査をしました。

(朝日) ありますね。

(菅) もちろんそのときは小野先生は鳴門にいらっしやっただすけれども、私もその研究の打ち合わせのために鳴門に行きました。私は本別と静内の、静内からは淡路島から法華宗の集団で来られた方を担当しまして、非常に面白かったです。どれだけ北海道方言が残っているかの調査です。

小野先生は小野先生で、仁木町だとか、旭川の永山とか。徳島から来ている移住者は北海道各地にいますから。こういうことをテーマとしてあり得るんだなということを見せて

いただいたという経験があります。それをちょっと付け加えておきたいと思います。

(朝日) どうでしょう、大鐘会長とか何か小野先生を巡ってのそれぞれかかわりがおありだとは思いますが、もしよろしければ情報提供いただけますか。

(大鐘) それでは、ちょっとさかのぼって、私は大学2年生のときに入会させていただいて。それは先ほど道場先生がおっしゃった自主的にということではなくて、当時の大学の言語学という講座に入って、その先生が方言研究会というのがあるから行ってみなさいということで推薦されてきました。五十嵐三郎先生の研究室で開催されていまして、そうそうたる方々が集まっていっしやいました。

当時の印象としては、決してある面ではアカデミックな感じではなく、民俗学的な、いろいろな生活だとか風俗だとか、そういったものを記述、興味、関心を持っていらっしやる方がたくさん集まっていたかなという感じがして、それが小野先生の1つのお考え方だったのではないかなという感じがします。

言葉に関心のある方であれば、とにかく皆さん集まってくださいという感じでした。その根底には、北海道の方言研究を推進したいという。これはやはり本州の方が見いだしてくださった課題ではないかなと思います。

当時は、特に道南の海岸部の方を研究されている、例えば漁業に関してとか、あるいは馬、馬産とか、留萌管内では高橋明雄先生のような、ああいう生活形態といったことを研究していっしやる方もたくさんいらして、とにかく言葉そのものを切り出すのではなくて、生活とか人というものをとらえようとされているのかなというふうに教えられました。

小野先生がよくおっしゃっていたのは、言葉の勉強を、言葉を通して勉強していくんですよということをよくおっしゃっていたので、それは私にとってはすごく大きい視点をいただいたかなというふうに思っています。

北海道の方はやっぱり北海道という地域を客観的に見ることができている部分がある

くあって、外から来た方にいろいろ教えてもらおうというのはすごく多いんですよね。今、150年ぐらいですか、海岸部だともっと長いんですけども、そういったことに私も影響を受けて、最近はずっと郷土史というか、北海道という地域はどういうふうにしたのかということ、言葉を通してとらえようという問題意識を今持っているところです。



先ほど道場先生がおっしゃったように、小野先生は決してこうしなければいけないという感じではなくて、非常に包容力のあるお方だったのではないかと私はすごく思っています。そういった姿勢を学ばせていただいたなと私は感じているところです。

(朝日) 佐々木さん、お願いします。

(佐々木) 僕が北海道方言研究会に出席するようになったのは、たぶん2005年ぐらいからではないかと思っています。一応、1994年の100回るときに顔を出していたというのはあるのですが、僕はそのとき、主観的には日本方言研究会では発表をしたつもりだったんですけども、北海道方言研究会のイベントと重なっていたことについては認識していなくて。後で文書で見て、実は出席していたんだというふうに気付いた次第です。

その後、2001年から札幌学院大学で働くようになってきたのですが、最初のうちは授業の準備だけで大変で、あまり研究も。博士論

文で茨城県の方言の記述をし損ねたところを調査したりしていました。それをまとめて、2004年に博士論文の改訂版がくろしお出版から出て、それを見た奥田統己先生のところの学生さんが卒論で、あれはたぶん岩内だと思うんですけども、岩内の方言の格について書いたんです。それで北海道方言研究会で発表したということで、発表を聞きに行けばよかったですけど、ちょっと都合がつかなくて行けなくて。こういうのがあるのかということで、その後で行くようになったと思います。出版が2004年だったので、たぶん2005年ぐらいですね。この時期は、小野先生はもう鳴門教育大に行っていた時期。

(道場) 2005年の4月に戻ってきた。

(佐々木) 北海道ですか。

(道場) 小野先生はね。それまで、だから11年間向こうにいたんです。

(佐々木) そうですか。じゃあ、もう僕が行くようになったころは北海道にいらっちゃって。

(道場) 戻ったんですね。

(佐々木) これは、私が京都に移る何年前か前なんですけれども、段ボールいっぱい文献をいただいたことがあって。それは、旭川時代に大学生と一緒に調査をやったのをまとめたものでした。各地のいろいろなところのがあったんですけども、それがいっぱい入ったものをいただきました。それを見ては、まだ全部目を通してはいないんですけども、すごい膨大なものを残されていて、それはすごいなと思っておりました。

先ほどもありましたが、小野先生は本当に何から何までなさる方で、実は方言研究というのは結構手間の掛かるものですし、自分で調べなければならぬものです。

それから、調査に行ったけれども協力してもらえなかったということもあったりして、行ったからといって必ずデータを持って帰れ

るとは限らないというところがあります。そういう大変なものなんですけれども、最近、実は僕、学部生の卒論を見るのは、おととしからやっと始まったんですね。実は札幌学院大学では1年生対象の教養部の科目みたいなものをずっとやっていたもので。それから立命館大学に移ってからも大学院生ばかり指導していたもので、ちょっと今、文学部との連携を強めるというのを4年ぐらい前から始めて、2年前から卒論を見るようになったのですが、方言をテーマに選ぶ学生は、わりとこれは軽くできるものだと思ってくることが結構多くて、どうやってそれを教えてくれる人を見つけるのという話をしていくと、これ結構実は大変そうなんですってと言われて。さらにそれをまとめなければいけないわけですよね。しかも、方言調査の場合には、どういふふう調査をしたかとか、そういう調査の説明からやらなければいけない。これはどうしてなのかという、読者はその調査に同行していないのだから条件が分からないですよね、みたいな話とかをしていくと初めて、卒論を出す半月ぐらい前になって、これは大変なんだなと(笑)。

本当にそんなことがあって、まさに小野先生はその辺、旭川時代は毎年のように出していらっしやって、これはすごいことだなと思っていました。あれを学生対象にシリーズ化して紹介する企画か何かをやってみたら面白いのかなと思っているぐらいです。

今、コロナ禍以来、結構講義動画というのがわりと簡単に作れるようになって、大学の方でもバックアップしてくれていますので、ああいう調査報告書を読むというようなシリーズをやってみるといいのではないかとちょっと考えています。方言調査の素晴らしいところと同時に、大変なところも一応知ってもらって。大変なところというのは、実はやってみると思い出になったりするところもあるので、それで学生を引き込んでいけたらと思っています。その上で、小野先生が残してくださった報告書というのはこれからすごく役に立つのではないかと、そんなことを思っております。僕からはこんな感じです。

(菅) 今の話で、小野先生が教育大旭川から北大に移られた後も、私は教育大の旭川校で非常勤で国語学の授業やゼミをやっていました。そのときに教育大では、木曜日だったか、午後の時間帯は自主ゼミみたいな感じのゼミがありました。自主ゼミみたいな感じで、午後いっぱい学生が主体となって、テーマを決めて話し合っていました。小野先生の時代からあったのだと思います。私はそばにいて見るだけでしたけれども、そういった機会ですらと授業やゼミ以外にも、学生同士の自主ゼミみたいな感じで、かなり活発で実質的なゼミが繰り広げられていたことを今聞いていて思い出しました。

(道場) それから、小野先生は16年間、学生と合宿しながらやったと書いていますね。それで何と、だいたい道内、道南から道北からずっと回って、まずびっくりするのは、必ず報告書を出しているんですね。28冊というのですから、僕もだいぶもらっているんですけども、私の出身の礼文島方言まで、いつ調べたのというくらいな感じで全部ものになっていますから、いまだにそれがあればまた追跡のいろいろな分析とかできるのではないかとというぐらい。

だから小野先生がすごいのは、調査したものを必ず報告に残すという、それはかなり信念があって、北海道方言研究会も調査特集会報が4つありますよね。それもやっぱりそれなりに、4つあるというか、4つはなくて2つしかなくていいんですけど、釧路と札幌は実際に出ていないですけども、増毛は松前についてはかなり当時としては学会では評価されましたよね。こんな小さいところから徹底してやっているんだと。そういう小野先生の、残すというか、発表するのと調査したものを残すという、それはもう北海道方言研究会も徹底したところがありました。そういうのは参考になりました。

(朝日) 北海道方言研究会として取り組んできた、特に先ほど言った増毛と松前は評価されたということは話題にもなったし、釧路もここに25号の会報は少なくとも釧路言語調

査のものでもあります。そこで、なぜ増毛を選んだのか、なぜ松前だったのか、なぜ全数調査にしたのか。例えば3世代いる家族を選んだとか。見ていると、釧路もそうですけれども、いわゆる町の特性ごとに新興住宅街と漁師町と旧市街みたいな感じで選んでいると思うんですけども、そういった選定に関しての経緯について、皆さんのご記憶とかご経験でご発言いただければ幸いです。

(道場) 増毛調査をするに当たってどうしたらいいとか、こうしたらいいという議論はそんなにないんですよ。結局、小野先生が設立してから……。

(朝日) 増毛の方がいらっしゃいましたよね。最初のころに。何か関係ありますか。

(道場) 高橋明雄さんが増毛出身ですよ。高橋さんから話を聞いたかどうか分かりませんが、議論はないですね。小野先生が段取って会ができて5年もたないでやろうとしているんだから、彼自身の考えがあって共同調査を絶対にしようという信念の下にやった、というふうに僕は思っているんです。



後から報告書を見ると、全数調査によってどのような結果が得られるかについて予測をつけているので、そういったものの結果、例えば年齢層とか、性別とか、どこから共通語化が始まるかとか、そういう部分を全数調査を通じて調査研究した事例はたくさんありますよね。だから、小野先生かなりの予測をつけたのと、また予測ができないものもたくさんあったりして。そのあたりが、調査の面白い部分でもあるし、難しい部分なのだと思います。

ます。ただ3地点なのは、信砂(ノブシヤ)というのはそれこそ全農業、それから大別荘(オオベツカリ)というのは漁師町です。それから畠中3丁目というのはまったく町の中の商業地ですよ。

小野先生が書いていらっしゃるけど、大別荘については道南の古い方言を意識しながら狙うこともできるし、また畠中3丁目は面白いんですけども、北海道の内陸方言、都市化の部分を持っているのではないかという予想が立つという。すごいなと思っていたんです。

そのような狙いどころがあって、結果を見ていくとやっぱり面白いですよ。いろいろなことを、あらためて今回また1回読みましたけれども、共通語化がどうしてなるかって今はだいたい分かりますよね。老年層からどんどんいって、子供が、若い子って分かりやすいけど、そのあたりがはっきりと確認できるような、そんな話です。

そのようなこととか、場面差とかいろいろなものを探してみると、もしかしたら小野先生に調査する目的というのがだいたいあったのだなと。その結果、いろいろ思うような現象もあったし、思わない現象が起こってき

て、その次に今度は松前調査につなげていって、松前と増毛の違いというものが、いわゆる松前方言ですから。道南のずっと古い方言ですから、それがどのように残っているかということと、増

毛の調査というのを追跡で果たしてどうなのかという部分を比較した可能性がありますから。極端な言い方をすると、増毛でかなりの部分が、海岸の部分で見たのではないかという気がしています。それを道北の増毛町、道南の松前町、そして道東の釧路、そして内陸方言の都市である札幌と、調査地点をおきました。

(朝日) 釧路の3つの地点の選定も、増毛も結局は変わらないですよ。

(道場) そうですね。

(佐々木) 大別荘については、海岸方言的な特徴ということをご期待したというのはすごくよく分かるのですが、信砂の方はどうなんですか。これはむしろ内陸方言的なものを期待したというようなことですか。

(道場) どうなんですかね。

(佐々木) ほとんど農業の方のところですね。

(道場) そうですよ。農業が中心ですものね。まあ、中間ですよ。

(佐々木) 中間。

(道場) いわゆる都市部として見ている畠中と、それから古い漁業の言葉を残している大別荘、その中間層としての信砂の農業従事者の部分がどうなるのかという、そういう狙いもあったのだけれども、結果的には共通語化も一番進んでいるのは畠中で、そしてその次に中間が信砂で、大別荘が一番最後というような結果になっていますから。

(佐々木) 北海道で農業をする方の場合、本州から移住していくという方が結構いますね。その辺のことを期待したのかなとちょっと思ったのですが。

(朝日) 私、この間の『新日本言語地図』でもそうだし、北見のところでもそうなんですけど、いわゆる海岸域なんだけれども、本当に浜言葉といたら、それこそ漁師さんのところに行くしかなくて。逆に農家の人という私は岐阜の人とか。例えば網走で調査した農家の人でしたけれども、九州の出身だったので。この浜言葉はあっちとって、全然やっぱり地理的な位置付けイコール、海岸域だと思って海岸方言ではないという見通しがあ

って、たぶんそこを見たかったのかなという気がします。

何かニシン漁とか忙しいときに、どこか山の上から来るけど、みんな浜言葉じゃなくて、でも何か手伝いが必要だから手伝ってもらっているんだという漁師の人の話とかも聞いたことがあるから、その辺は事前に歩いて気付いていらして、それをある意味確認すべく、共通語化というスケールで見たとは思いますが、あえて設定されたのかなというのを伺いながら思いました。

(道場) 佐々木さん、さっき答えられなかったんですけど、小野先生が書いていらっしゃることで今ちょっと訂正すると、まず大別荘のモデルとしてこういうふうに使っています。北海道道南方言の関連を見たいと。それから信砂については、北海道内陸部の農村地域。

(佐々木) やはり内陸部。

(道場) そうということですね。それから、畠中は北海道の諸都市の方のモデルということで狙ったと。だけど、どうなんですかね。結果的には内陸的な特色があったのか、中間ですから何とも言えないですけども。そのような狙いがあったということ、小野先生が『北海道方言の研究』に書いています。

だから、結構小野先生の狙いどころはたくさんあって、参加した調査者はよく分かっていないということがあって。ここだけの話ですけども。

(佐々木) 調査に参加した方ならではのことをちょっと聞きたいのですが、まだ捕らぬたぬきの皮算用なんですけど、来年調査しようと思って1977年の調査票を今研究しているのですが、調査項目が207あるんですね。

(道場) そうですね。すごいですよね。

(佐々木) 今、朝日さんに1つ1つのテープを電子化していただいているのですが、1人を対象にした調査でだいたい60分のテープ

で収まっているんですけど、200 近くのをよくこの時間で調べられたなというような感想をちょっと持ったのですが、どんな感じで。結構急いだ感じですか。

(道場) いや、僕個人で言えばそこで収まらないで、別なテープを使った部分もないわけではないです。

(佐々木) そうですか。60分に収まらないことも。

(道場) 収まらない。要するに話者との、調査の状況が。やっぱり若い人はうまく反応するし。アクセントも含めて同じ調査項目ですからね。だから収まらなければ、やっぱりちょっと延び延びになっているところも。みんながみんなではないけど、僕は、個人的にはありました。それが残っているかどうかは別にして。まあ、残っていると思いますけれども。

(佐々木) あの中で、共通語化ではなくて地域的なものは若い世代で出ているのがありますね。「よかろう」に対応する形式が、「イカベ」とかだったものが、「イーッショ」になっていっているというような。それはかなりの勢力を保っていて、あの項目については調べる方は事前に皆さん知っていたんですか。それとも調査に行っただけで初めて知ったんですか。

(道場) 僕らはまったく増毛の言葉というのは知らないから、だから生々しいですよ。調査に行っただけで、僕は北海道の海岸部の出身だから、内省が利きますよね。海岸部だからね。そんなものもあるのかと、やっぱりそうかというのもありましたね。

(菅) それは井上先生、新方言は増毛の調査で気が付いたとおっしゃっていますよね。

(道場) そうですね、だいぶ出ていますよね。

(見野) 井上先生の論文に増毛と、井上先生は別に増毛、松前調査の前に、北海道方言研究会と関係なく岩内調査に入っていますよね。その後、増毛、松前って出てきますよね。その3点というのは、今ではやられているところでは、日本海側の調査としては大切な調査だと思うんですけど、増毛の海岸部と比較しています。岩内の方は外れの七部落、八部落という漁民たちが住んでいるところに調査に入っている。もちろん西側の方の市街地もやっていますけれども。

(道場) 体にできた内出血「あおたん」を新方言と定義付けたんですよ。だけど、私は礼文島で生まれていますけど、「あおたん」使っているんですよ。それが何で地方共通語化なのかという疑問を持ちましたよね。要するにデータが出てくるから、若者と若者でない人のデータの差がめちゃめちゃ近いわけだから、離れているわけだから、それはやっぱり新方言というか。だからいろいろな考えがありますけど、そこでは新方言。だけど礼文島では新方言でないというケースも結構あるという観点を、また見ましたけれども。

後に松前なんかも調査すると、また特殊な、具体的に言うと、トウモロコシを「きみ」と、増毛では「とうきび」だけど、松前では「きび」。それから、松前ではジャガイモのことを「いも」。でも増毛では言わないというようなことでの、同じ海岸方言でもやっぱり古さなのか、地域差なのかという観点もありますけれども。

(朝日) 今後に向けた視点ということで、事前に用意した質問には2つ挙げさせてもらっています。50年という節目に当たって、例えば、これまでも特に増毛、松前、釧路、札幌での調査もあるにはありましたが、これから研究会として取り組むべきテーマについてのご提案、若い人に向けて何か伝えておきたいことがあれば、教えてください。

(菅) 会員の中には、ふるさとのことばを記録し、方言集を作りたいということで会員になった方もおられます。地域で自分たちの方

言を記録して残しておきたいという活動があった場合、当研究会としても専門的立場から手助けすべきではないかと思えます。

(見野) 私、最近ふと思うことは、今まで行われた海岸部の方言、内陸部の方言で大きな調査がありますよね。海岸部ですと、今問題になっていました増毛と松前。その間に、それより先行して井上先生の岩内調査はかなりしっかりしたものですけれども、北大に文献が残っています。そういう3つがあると。

内陸部ですと、国立国語研究所が富良野で行った、年代がちょっとずれてきますけれども、それは富良野に付随して、例えば日本海側に影響がある札幌の調査とか、それから道東の方に影響があるだろうと思われる十勝、帯広での調査とかそういうのがあるわけですが、これらの調査を文献として個々に利用するのではなくて、1つの観点を持ってこれらを全体として統合して眺めたときに、何か今まで見えていなかったものがひょっとしたら見ることができるとも思えない。問題意識を持って全部。

これらの調査というのは、みんな私は大きな違いはないと思っていました。増毛にしる、松前にしる、細部はあるでしょうけれども、調査の仕方といいますか、方法としては調査地へ行って直接聞いて、テープを取ってということですから、そこで大きな違いが出てくるということは、方法論としては同じ考えでやっているのではないかと。内陸部もそうではないかと。国立国語研究所もやっていますから、当然増毛も国立国語研究所の調査法というのはしっかりと踏まえているだろうと。

そういうところを見ると、これらを個別に文献として使うだけではなくて、これだけのものを統合的に、総合的に見ていったときに、当時の北海道方言の状況というものを全体的に、全部ではなくても、とらえることができるのではないかと。それをとらえられたら、私は、ひょっとしたらそこから新しい、今まで気が付かなかった研究方法なり、考察なりというのが出てくる可能性があるような気がしていました。それが1つです。

もう1つは、テープを取っていますけれども、

これらの調査のときには決められた調査項目でテープを取っていくわけですが、そうではなくて、そこで落ちてしまうものがかなりあると思います。そうではなくて、実際にそれとは全然、そういう方法ではなくて、直に現地に自分が行って、漁師さんなら漁師さんの日常の話している話をそのまま、自然談話と言ってもいいでしょうけれども、そういうもの採取していくと。北海道方言研究会なら北海道方言研究会として計画を立てて、みんな会員のできる方が分担してといいますか、共同研究はなかなかやりづらいことがあるでしょうけれども。そうしてくると、これらの調査では見えないものが、自然の会話ですから中にはあるだろうと。地方特有の言葉というのもありますけれども、そんなものだって日常の言葉で話すから自然と出てくる可能性はあるのではないかと思えます。

そういうところなども新しい視点なのかなと思ったり。自然談話を採取するというのは結構いいのではないかと。何か見えだす、落ちている、発音だけではなくて、語法面でも何か見えるのではないかと、そんなことを自分でアンケートを配って、やってみて思ったことです。自然談話というのはなかなか採取できないですけれども、そういう点では、そういう発想というのは、私は井上先生からいただいて。奥尻の地震についての資料は自然談話なんですね。

(朝日) 道場さんいかがですか。若い人に向けて何かメッセージはありますか。この研究会が、北海道方言を志す者に向けて。

(道場) 若い研究者は、今までいろいろな方たちが、論文なり、それから報告書なり、うちの北海道方言研究会の会報によって、こうやっているものを、まず本当に基本的なことをちゃんと押さえて研究を行っているのかなと。自分はそうですからね。やっぱりそれをもう少ししっかりとらえて、その中でいろいろなテーマがあるんだというふうに見つけていくかということがやっぱりあります。

それから、調査する場合、語彙とか文法と

か、ほぼ音韻までは何とかいいですよ。ところが、アクセントとかイントネーションというのは、やっぱり実際に調査を体験して何回もやらない限り分からないですよ。だから、皆さん、これから増毛調査をやるときに、そうそうたる方で調査を経験している人たちがばかりが参加していれば、特に問題はないと思いますけれども、特に北海道出身者、僕なんかはアクセントに対して非常に疎いんです。自分自身の内省もなかなか難しく、そうか、雨は、共通語は「ア]メ」だったか。でも「アメ]」だよねとなるわけでしょう。そういうことで、高校の授業の中でも僕は話していることが、教え子の札幌の生徒たちですけれども、「先生違うんでない？ 浜弁でないの、それ」と言われることがあるわけです。

それからよく言われるのは、小野先生とか研究で発表していますけれども、北海道の人が標準語と思っているのは、実は東京ではなくて札幌だとか。言語意識が全国のほかの地域の人たちとちょっと違うわけですよ。そうすると、実は、ある機会にたまたま僕が、北海道方言研究会の事務局長をやったということで、ある民放の、放送局名は言えませんが、あるところのアナウンサーの研修ということで、北海道方言について話してくださいという時間をもらえたんです。北海道方言についての講師をやっていて、僕が質問をしたんです。「これは標準語ですか、共通語ですか」と言ったら、全国から来ている人はだいたい分かるんです。だけど道産子、「どさんこワイド」じゃないですけど、道産子のアナウンサーは、「それ標準語じゃないの？」と。僕が、「実は、これは標準語ではない」と。「北海道の地方共通語なんですよ」と。

恥ずかしい話、私も北海道出身の教員ですから、やっぱり北海道の言葉に対する認識が、非常に道外の人と比べて甘いんですよ。言語認識が足りないんです。漠然としているというか。そういったものも含めて、いろいろ、まず文献とか調査というのを若い人がしっかり学んで、そしてそこから自分のテーマというものを見つけていってほしいなど

思います。

だから、いきなり自分の研究テーマに飛びつくのではなくて、これは面白いなどだけで飛びつくのではなくて、基本的なことをしっかり、文献がありますから、それで勉強する時間も設けながら新しいものを作ってほしいというのが、ちょっと自分の体験の上で思ったことです。

それから、小野先生もずっと言い続けていますけれども、国語教育に方言研究は生きているのかと。私もそうですけれども、自分で研究しているんだけど、実際に国語教育のときに生徒たちにそれを還元しているかどうかという、ほとんど還元していないですよ。先ほど言ったように、まったくほかの人たちは北海道の方言に関心を持たないわけですから。だからできれば、ちょっと難しい話だけれども、国語教育に、教員も含めて。もう1つ言うと、北海道の人が北海道の言葉についてあまり認識を持っていないと。そういうものをちゃんと、北海道の言葉はこうなんだよというふうに知らしめて、それは、正しい言葉遣いとか、標準語に近いようになれというのではなくて、北海道の方言を認識した上で、どういうふう言葉を使っていっただいいかということは、この問題は、意外と方言の研究をしている自分も含めて、おろそかにされているのではないかと。それは小野先生がずっと前から指摘しておりますから。

いろいろ言いましたけれども、国語教育の話と、それから北海道民の言語、北海道の言葉ってどういうものかというのを認識した上で、どういうふうなよりよい言語生活を送っていくかという、そういうもののテーマも必要だなと思いました。

(朝日) ありがとうございます。

(菅) 国語教育ということで言うと、小学校の学習指導要領は、4年生ですかね、方言について取り扱ったんですけれども。昔の知識で、変わりましたか。とにかく、そういったときに方言の副読本みたいなものというのはあるのでしょうか。

(道場) ないでしょうね。

(菅) ほかの分野、地理的なものとか何かだとありますよね。北海道の方言に関する副読本みたいなものがあったらいいなと。

(道場) 例えば全国のある地方だったら、自分の方言のことや、言葉で苦労するから、そういうテキストがあるというのを聞いたことがありますよね。でも北海道はまったくないですよね。それで、ちょっとPRになりますけれども、この本は絶版ですが。我々は一番最初に、『おぼんでした』を刊行しました。これは小野先生が中学生を対象にして語りかけているんです。素晴らしい。読み返してすごいなと思っているんですけど、北海道のお年寄りも見たいけれども。若い人に北海道の言葉というのがどんなものかというのを、かなり専門的なことばかり書いていますけれども。そういうのもやっぱり、これなんかは、意外と副読本になるのではないかなと。

昔、五十嵐三郎先生とか石垣福雄先生が、道内の新聞に北海道の方言、語彙ですけども、シリーズでずっと載せていましたけれども。ただ、いろいろ考えがあると思いますけれどもね。この間、テレビの「ケンミンショー」(県民ショー)の話題で、北海道の方言の「書かされた」の解説で、実は会長の大鐘さんが出ていたので、テレビなんかに出て「北海道方言研究会」を少しPRしてもいいんじゃないと思って(笑)。

(見野) 最後に、感心したというか、アーカイブがあるでしょう。北海道方言研究会の発行物。すごいことをやられたなど、功績じゃないかなと。あれを見ていて、本当にここだけではなくて、みんなインターネット時代になって、本州の方の方言の研究をやる人たちの間に存在も知らせて。しかも、今まで歴史的に何をやってきたのかと全部出るように組んでいるでしょう。

(朝日) 最後に大鐘会長、先輩方のアドバイスを受けて所信表明というか、何か一言お願

いします。

(大鐘) 最後に、これからの北海道方言の研究テーマとか、若者に伝えたいことをお話してくださいました。非常に目にうるここといいますか、重いテーマというか、まだこういう分野の研究が残っていたんだなというのを改めて感じさせていただきました。

それぞれ北海道方言研究会から距離を置かれていますけれども、いまだに北海道方言について、これからどうしたらいいですかということを本当に適切にご助言いただいたなという思いでいっぱいです。まだまだやることがあるぞということを教えていただいたという思いで本当に胸がいっぱいになりました。ぜひその言葉を受けて、会員の皆さんと一緒にまた頑張りたいなという気持ちが今日湧いてきました。本当にありがとうございます。

